

脇屋 幹夫 展

新世界表現最終章
- 現代を点検する本棚 -



2015.8/6-8/11

画像・イラスト等の保存・無断使用・転載・二次利用等は堅く禁止します



今週の展覧会は、脇屋幹夫展「新世界表現最終章ー現代を点検する本棚ー」です。新世界表現シリーズも5年目を迎え、いよいよ最終章となりました。脇屋先生の表現は、本棚を模し、サブタイトルに沿った背表紙のタイトルが我々に何か訴えるような絵画表現が特徴です。はじめに『第1章ー本棚ーもう一つの自分の世界ー』とあり『第2章ーCDー音楽のたのしみー』、『第3章ー文庫棚ー記憶と想像力の拡大ー』、『第4章ー人生の観察と思索の本棚ー』そして『最終章ー現代を点検する本棚ー』と続きます。作品の本棚を見ると、それぞれ著者が述べる現代に対してのタイトルが日本に対しての社会や風刺を捉えることが出来ます。

絵画とは美術のなかで最も古くからある表現方法です。我々が普段から使用しているこの文字も本来は記号であり、伝達するための統一されたツールでもありますが、これらはイラストと言っても過言では有りません。見た物事を後生に伝えるために描いたものは、一方は文字へ変わり、一方は宗教と絡むことで西洋絵画が発展し現代の絵画に至ります。西洋での絵画の発展には様々な経緯や思考がありますが、同志のみが理解する事が出来る隠されたメッセージなども数多く残され、現代でも解読する為に研究が続けている芸術作品があるのも事実です。そして、現代ではアニメーションの発展により、漫画などが多く普及されたことで近年、新聞や書物離れが目立ちますが、本来これら全ては一箇所から発展した同じ分野とも言えるのです。ここで先生の作品をみると、作品に描かれた本棚の背表紙が特徴ですが、「絵画」の中にある本のタイトルを読み取り理解することが出来ます。「絵の中に文字」という大変珍しいスタイルで、ここ茶屋町画廊にて毎年展示されている作品の中でも脇屋先生だけが表現する作風でもあります。本として本屋に陳列されるものとは違い、一種のインスタレーションとして表現された本棚の作品には、無限の表現としての可能性を秘めているのかもしれない。来年はどのようなシリーズが始まるのでしょうか、とても楽しみです。